

令和3年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体の正答率を見ると、全ての学年が全国値の平均を同等かそれを上回っているが、昨年度の校内の平均正答率を大幅に下回っている。観点別で見ると、「知識・技能」、「思考・判断・表現力」の観点では、全ての学年の平均正答率が同等かそれ以上なのに、「主体的な学習に取り組む態度」の平均正答率はどの学年も低い傾向にあった。昨年度はコロナ禍の影響で、以前の学習指導要領でいう「話す・聞く」の領域の単元はほとんどできない状況であった。また、話し合い活動にも制限があるため、国語科のようにコミュニケーションをとりながら問題解決することができず、児童の主体的な学習に課題がある。感染対策を講じながら、交流を深め深い学びを進めていき、単元の中で自己調整を図ることができるような児童を育てていく。
社会	学校全体(5～6年)の正答率について、5年生では全国値を上回ったが、6年生においては、平均正答率が60%と下回った。5年生は学習内容を概ね理解できており、基礎的な知識の習得や資料を読み取る力も身に付いていると言える。6年生はコロナ禍の影響もあり、国土や産業などの社会的な事象について、見学や体験など実際に肌で感じる筆が困難な状況であったことが、「知識・理解」の向上につながらず、観点別の正答率にも影響が出たと推察できる。身近な都道府県の地理や特産物など、資料を読み取りながら特徴を理解し、実際に見たり触ったりしながら「生きた学習」を通して意欲を高めていきたい。
算数	学校全体(2～6年)の正答率は全国平均をほぼ上回る結果となった。観点別で見ると「主体的に学習に取り組む態度」の項目において、すべての学年で目標値を超えているか同等であった。「知識・技能」の観点を見ると、どの学年も目標値よりも平均を超えていた。できた喜びによって児童は自信をもち、「主体的な学習に取り組む態度」の資質向上につながっていると考えられる。ただ、「思考・判断・表現」の観点を見ても、3年生、6年生の平均正答率が目標値を下回っていた。量感や答えの見積もり、文章題を数直線で示すことなど、問題文を読んで数値をイメージすることが苦手な児童が多いことから、生活場面への置き換えや、複雑な数値から整数への変換、具体物を用いる等、児童の理解を図る工夫をしていきたい。
理科	学校全体(4～6年)の正答率は、70%近くで全国値平均とほぼ同等だったが、6年生においては正答率が60%を下回っていた。カテゴリ別の項目を見ると観点の「主体的に学習に取り組む態度」は学年が上がるにつれて目標値から数値が遠ざかっている傾向が見られた。自然事象の仮説を立証するためには、実験を行うことがカギとなる。しかしコロナ禍によって一人一人が充実した実験をすることができず、師範実験が増えた。よって「なぜ」が生まれにくく、子供たちの意欲や関心が高まりづかったと推察できる。感染対策を講じた上で、子供たち自らが実験を行う授業を展開していくことで、児童の理解の向上につなげていきたい。

本校の教育目標
○よく考える子
○体をきたえる子
○思いやりのある子
○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
<ul style="list-style-type: none"> <li>生きて働く「知能・技能」を習得する力</li> <li>未知の状況にも対応できる、思考、判断し、表現する力</li> <li>学びを人生や社会に生かそうとする、学びに向かう力</li> </ul>

学力向上にかかわる経営方針
<ul style="list-style-type: none"> <li>北区基礎・基本の定着度調査等の結果を基にした個に応じた指導の充実</li> <li>「できる」喜びが味わえる授業改善</li> <li>GIGAスクール構想に基づく、ICT機器の活用</li> <li>授業観察による指導・助言や校内研修等のOJTの推進(きたコンの扱い方を含む)</li> </ul>

校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会(研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会)、分掌(授業改善推進プラン、図書館、GPO研修会【GIGA構想に係わる研修会】)、放課後補充教室(学力フォローアップ教室)等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>課題解決型・探究型授業の実践</li> <li>学習活動「振り返り」の充実</li> <li>児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり</li> <li>十分な教材研究によるねらいの明確化</li> <li>児童が主体的に取り組む学習活動</li> <li>授業のユニバーサルデザイン化</li> <li>GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業時間確保のための学校行事の見直し</li> <li>新学習指導要領解説及び小中一貫カリキュラムに沿った内容を、さらに独自に解説を加えた「要約集」の積極的な活用</li> <li>次年度実施に向けた、生活科・総合的な学習を中心としたカリキュラムマネジメントの完成</li> <li>放課後補充教室(フォローアップ教室)の充実</li> <li>個別最適化をねらった学習タイム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICTの活用を通して主体的に学ぶ児童の育成を目指した授業の実践</li> <li>授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観(ブロック会で事後検討)</li> <li>GPO(きたコンの使用法・授業での活用方法などを全職員で行う研修)のサステナブルな計画の作成、及び実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施</li> <li>評価規準や評価方法の工夫・改善(きたコンを利用したポートフォリオ評価の活用)</li> <li>きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成</li> <li>PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化</li> <li>主体的に学習に取り組む態度の「自己調整」及び「粘り強さ」の具現化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校ファミリーで情報交換</li> <li>地域の教育力の活用</li> <li>ホームページの充実と更新</li> <li>学校便りの発行(月1回)</li> <li>80周年記念式典の準備、交流を通して学ぶ郷土愛・地域愛の育成</li> <li>児童の変容を自身も保護者も感じることができるキャリアパスポートの活用</li> </ul>

### 指導方法の課題分析と具体的な授業改善案(3年)

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	内容別正答率を見ると、「漢字を書く」以外、全ての内容別・観点別・領域別に課題が見られた。よって、教科書の音読、物語文や説明文の読み取り、作文等を丁寧に指導していく必要がある。また、話の内容を聞き取る力を更に伸ばしたい。	説明文では指示語や接続語の役割、物語文では人物の気持ち等を読み取る力を養う。また、家庭学習で音読に取り組みせたり、段落を考えて日記を書かせたりさせ、それをしっかり担任が確認し、学校でも指導する。また、本を紹介する単元の学習を充実させ、読書の楽しさを体感させる。	読書タイムの読書を充実させる。まずは、学級文庫を充実させ、自宅から持って来た本の読書も奨励し、友達にも勧めさせる。更に日記を積極的に書かせ、それに目を通して指導する際に、段落構成、主語と述語の対応、簡潔な文を書く事を心掛ける事等について個別に指導する。
社会	本年度は社会科学見学に出て体験的に北区内の様子を知ったり、お店の工夫を調べたりすることが、学区外、ここまでは出来なかった。そのため、机上の学習は理解できても実生活に学びを結びつけることが困難であった。保護者の力も借り、教科書での学習を、実社会に出て確かめたり体験したりできるようにしていく。	北区の土地の様子については本校の立地を生かし、川沿いの土地の様子や高い土地の様子等を学ばせた。それと同様、身近にある事物に関心に向け、教科書での学習を自分の住む地域と結び付けたり、出かけた土地と結び付けたりしながら、学習内容が実体験と合致するように、資料や実物も見せながら学習を進めていく。	学校だけの学習で終わるのではなく、家庭に帰ってから出来ることについて声をかけていく。また、家庭学習でお店の工夫や工場などについて調べてきた児童を適時取り上げて賞賛し、他の児童も学習に対する興味や関心が高まるようにしていく。
算数	内容別・観点別・領域別全て、区の平均を下回る結果となった。まずは基礎的・基本的な力の定着を図る必要がある。また、より正答率を高められるよう、さまざまな問題に触れる機会を設ける必要がある。また、「主体的に学習に取り組む態度」が低いので、児童が興味をもって学習に取り組めるような工夫を行う。	児童が興味・関心をもって学習に取り組めるよう、具体物を用いたり、日常生活の中から問題を設定するなど、導入の工夫を行う。また、基礎的・基本的な計算力を身に付けるために授業の最初や学習タイム、家庭学習で計算問題を取り入れていく。この際、学習中の単元だけでなく、前学年を含めた既習事項も繰り返し振り返ることができるようにする。また、既に学習が十分に定着している児童の場合は、説明する力など、表現力を伸ばせるような活動を取り入れる。	本学年は算数における理解力の差が大きい。そのため、習熟度に合った学習内容となるよう、児童の理解力の把握、教員間の情報共有を徹底する。習熟度の低い児童には基礎的な内容のワークシートを作成し、習熟度の高い児童には発展的な内容のワークシートを作成する等、それぞれの児童にあった事前準備をする。
理科	自然事象に対する興味や関心が高まる年代であると共に、教科の好き・嫌いが分かれ始める時期でもある。児童が理科に対して「すごい!」や「なんで?」といった驚きや疑問を持ち、理科嫌い、理科離れを生まない素地を築くことを授業づくりの基礎としていく。	観察単元の多い学年であるため、児童の興味や関心を高めることを大切にする。観察対象である動植物をいつでも見られるようにするため、花壇や教室での飼育や栽培を行う。また、動物が苦手な児童には無理をさせず、友達と一緒に飼育をしたり、友達が飼育する様子を見るようにさせる。	自分の住む地域にも、理科で学習したような自然事象や、実験で知ったような現象があるかを興味をもって探させる。また、植物の学習が年間を通してあるため、日本の四季にも関心を持たせ、季節の変化を体で感じさせて行く。